SPECIAL FEATURE 特集 2

次世代の伝承

東日本大震災の経験や教訓を今、そして未来に伝え続けるため、宮城県内では様々な取組が行われています。
VRやITを活用した伝承、次世代を担う若者への伝承、次世代である若者自身による伝承。
次世代が明るい未来をつくっていく礎となる取組を紹介します。

VRツアーで南三陸の今を体感

南三陸ラーニングセンター 浅野拓也さん

埼玉県出身。大学卒業後、広告制作会社で編集・ライター業を経験。休日には被災地のボランティアに参加。平成26年、南三陸町に移住。南三陸ラーニングセンターでのオンラインツアーなどのコンテンツ制作を担当しています。

東日本大震災以降、様々な研修プログラムを、学生と社会人を対象に行ってきた南三陸ラーニングセンター。新型コロナウイルスの感染拡大を受けた令和2年以降は、オンラインでの研修・ツアーに力を入れてきました。現在は、VR（バーチャル・リアリティ）を利用したオンライン研修・ツアーを提供し、話題となっています。

研修コーディネーターを務める浅野拓也さんは「コロナになって、それまで対面で行っていた研修やツアーができなくなって、オンラインに力を入れるようになりました。震災10年の年でもあったので、そのなかの一つとして、オンラインでありながら現地の様子を体感できるVRのオリジナルのコンテンツを作ってみようということになったんです」と話します。

VRのツアーは、体験者が自分のスマートフォンに特殊なレンズを取り付け、動画コンテンツを視聴するというもの。震災伝承のプログラムを実際に体験してみると、南三陸町旧防災対策庁舎の迫力に息をのみ、語り部の方の話にこみあげてくるものも…。浅野さんの制作したVRツアーは、想像以上のものでした。

浅野さんは「研修のコンテンツは、要望があるものをオーダーメイドで作っています。実は、オンラインにしてから、VRも含め研修の数が増えているんです。現地に来るまでの費用や時間の問題が、オンラインで解消されたのだと思います。今も、被災地に思いを馳せてくださっている方はいるんですね」。

今後様々な分野でVRを活用し、南三陸を全国に発信していく南三陸ラーニングセンターの取組に、期待が高まります。

宿泊研修施設での震災学習プラン

南三陸ラーニングセンターを運営する南三陸研修センターでは「南三陸まなびの里いりやど」の運営も行っています。

「震災、そして復興の今」を学ぶことができ、施設内にはライブ配信スタジオや会議室も備えているほか、宿泊者限定「震災学習プラン」も提供しています。

ICTの活用で、社会と地域の課題に取り組む

NTT東日本宮城事業部

（左から）ビジネスイノベーション部 高橋由佳さん、佐藤裕子さん、森勝哉さん

地域の様々な産業、人々の暮らしの課題解決や価値創造、そして持続的発展が可能な社会の実現に向けたICTの活用に取り組んでいます。また、社会貢献活動、医療分野への貢献にも取り組んでいます。

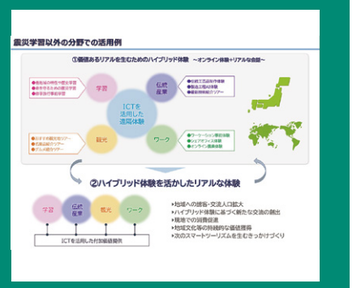
NTT東日本宮城事業部では、ICT（情報通信技術）の力を使った、「復興ツーリズム」の取組を行っています。この企画が始まったのは、震災から10年の節目を迎えようとしていた令和2年の秋のこと。ビジネスイノベーション部担当課長の高橋由佳さんは「弊社では、震災直後から被災地の通信インフラの復興に携わってきました。そんな中、震災伝承館様等から、震災から10年という節目がコロナ禍と重なり、本来ならば被災地で体験できるはずの語り部による震災伝承ツアーなどの実施が難しくなったことを伺いました。そこで、私どものICT技術を活用し、宮城県内外の企業や学校に向けてのオンラインツーリズムができないか検討を開始したのです」と話します。

令和3年、仙台市内や東京都の小学生、宮城県内の中学生やアメリカの高校生に対し、語り部の方の講話や震災遺構バーチャルツアーなどを交えた防災教育を行いました。当日、現場での配信サポート業務にあたったという同社の森勝哉さんは「小学生向けの防災教育の中で、語り部の方が『通学路の危険箇所を確認してください』とお話しくださったのですが、その後生徒さんから『家に帰ってお母さんと確認しました』というお手紙をいただき、オンラインを活用した防災教育の効果を実感しました」と教えてくれました。同じく現場でのサポートにあたった佐藤裕子さんは「被災地の語り部の方が内陸の中学生にお話をしてくださったのですが、海に面していない地域でも自分ごととして聞いてくれていたのが印象的でした」と、振り返ります。

高橋さんは「これからも被災地と幅広い地域の皆さまをおつなぎできるよう、ICTを活用し、震災伝承に取り組んでまいります」と話してくれました。

今後はビジネスとしても展開

今後は、震災伝承だけでなく、東北の地域活性のためにもICTの活用を行っていくという、NTT東日本。観光地やワーケーション、伝統工芸、漁業、加工工場などを事前に紹介することで「オンライン×リアル」のハイブリッド体験を提供し、地域への誘客や交流人口の拡大を目指しています。



SPECIAL FEATURE 特集 2

次世代の伝承

先輩たちが学んだ旧校舎で高校生による語り部活動

KSC（Koyo Storyteller Club）向洋語り部クラブ

（左から）佐藤瑞記さん、岸貴司先生

先輩たちが学んだ旧校舎である気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館と連携した語り部（館内ガイド）活動を行う有志生徒の団体。中には、自分自身でシナリオを作成し、語り部として活躍している生徒もいます。

「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」として旧校舎が公開されている、宮城県気仙沼向洋高等学校。旧校舎と同じ階上（はしかみ）地区の内陸に建設された新校舎への移転後、令和2年に「KSC（Koyo Storyteller Club）向洋語り部クラブ」が発足しました。現在、部員数は36名。その発足について、顧問の岸貴司先生は「階上地域というのは、中学校、小学校ともに防災教育に力を入れていて、防災を学ぶのが伝統になっています。中学生が語り部のボランティアをするなど、防災意識が高い地域なんです。それで、高校でも『地域の防災リーダーを育成しよう』ということで、令和元年から県外の防災施設や防災教育先進校の視察を始めました。現在の部員の中には、阪神・淡路大震災の震源地である淡路島の高校を視察した生徒もいて、そこで高校生の語り部と出会ったことで、大きく意識が変わったようです」と話します。

3年生の佐藤瑞記さんは「震災を経験していないのに、きちんと伝えることができていて、すごいなと思い、私もやってみたいと思いました。私自身、震災で人が生死をさまよう瞬間を目にしたし、同級生が亡くなってしまったこともあり、震災のことを話すのがタブーだと考えていた時期もあったんです。でも今は、無理に思い出さずに、事実としてあったこと、そしてそこからどんな教訓を得たのか、前を向くことが大事なのかなと思うようになりました」と話します。

県外からやってくる同世代の学生に語り部として語ることも多いという佐藤さん。「来た方は熱心に聞いてくれて質問もしてくれる。同世代なので話しやすいかもしれません」。

毎月月命日には伝承館で無料の語り部ツアーを行っているそうなので、足を運んでみてください。

卒業後も伝え続ける

KSCの卒業生の中には、就職、進学後も伝承館に語り部として登録し、活躍している人たちがいます。岸先生は「KSCの活動はほかのこと優先で構わない。無理せず、自分たちのペースでやってきたことが、卒業後も続けてくれることにつながっているのでは」と話してくれました。

若者たちと震災の教訓伝承と備えの大切さを学び合う講座

河北新報社 防災・教育室

311 次世代塾 伝える／備える

平成28年に設置された専任部局。防災・減災に関連したプロジェクト全般を継続、推進しています。「むすび塾」「次世代塾」を行い、東日本大震災を契機とした防災教育に注力しています。

河北新報社が、平成29年から取り組んでいる通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」。これは、東日本大震災の伝承と防災啓発の担い手育成を目指しているもので、参加者の皆さんは、震災で起こったこと、そしてその教訓をほかの地域や次の世代にどう伝えていくのかを学んでいます。

同社防災・教育室部次長兼論説委員会委員の須藤宣毅さんは「被災地の新聞社として何ができるか、何をすべきかを考え、震災の翌年から巡回ワークショップ『むすび塾』を行ってきました。これは、町内会や学校などでそれぞれの震災の体験から、地域の防災について考えてもらおうというものでした。新聞社の従来の取組の枠を超えて、こうした防災教育活動を行ってきた結果、平成29年に『次世代塾』を発足させることになりました」と話します。

次世代塾に参加している大学生は、当時はまだ小学生。「なんとなく大変なことが起きていたのはわかっていても、それがどういうことだったのかは実感を伴っていないんです。語り継ぐことの重要性はわかるけれど、自分がそれをしていいのか？と考える人もいるんですね。でも、語り部さんもよく言ってくださるのですが、『被災の当事者だけが伝承者になるのではない』ということ。今参加してくれている人たちは、リレーでいうと第2走者で、第3走者にバトンを渡せるようにしたいという思いで参加してくれています。震災から10年という一応の節目は迎えましたが、弊社では、今後もこうした防災教育活動は継続してやっていきます」。

河北新報社は、これからも震災を語り継ぐ“走者”を育てていきます。

第5期生 早坂 綾香さん

教員を目指しています。私は大きな被害を受けたわけではないので、子どもたちに防災についてきちんと伝えられるか不安でした。

次世代塾に参加して、防災はもちろん、自分自身の生き方に向き合うことができました。いつ何が起こるかわからないから、大事に生きなくてはと思います。